

## 大久保村の中村家（二）

中村アキヤ

### 前号までの経緯

大久保村の名主の中村と戸塚村の名主の中村との関係はどんなものであったのだろうか？ 新宿歴史博物館の推論によれば、江戸初期に中村姓の三兄弟が武蔵の国に流れ着き、家系書を持っている長男が大久保村に住みつき、次男または三男が戸塚村に居を構え、うちの一名が観音寺を創設したのであるという。観音寺の家系は寛永の頃断絶したが、大久保村と戸塚村の中村はその後相互の交流がないまま現在に至っているという。

これらの推論には信じ難く、次に述べるような種々の疑問点が湧いてきた。

疑問① 中村一族は何故江戸の西のはずれの大久保村や戸塚村に住みつたのか、その時代背景にはなにがあったのか？

疑問② 武蔵国在の中村家の家系を遡ると、なぜ近江の守護佐々木氏信につながるのか、何時佐々木から中村に改名したのか

疑問③ 何故現在の中村家の菩提寺が観音寺と呼ばれたのか、

そんな疑問をいだいたまま数年経過したある時、山梨県塩山市にある武田信玄菩提所の恵林寺を訪ねた際、偶然快川和尚が焼き討ちにあったいわれを知った。そして、武田家にかくまわれた近江の守護佐々木一族が甲州街道を武蔵に向かって落ちた事実から、その一行のなかに中村家の祖先がいたのではないかと思うようになった。

### 恵林寺炎上

江戸幕府が開かれる八年前の天正十年（1582）四月三日甲州塩山の笛吹川畔にある名利恵林寺が炎上した。この乾徳山恵林寺は元徳二年（1330）夢窓国師の開山といわれ、戦国時代甲斐の国主武田信玄が永禄七年（1565）に臨濟宗の名僧快川紹喜国師を招聘して以来、寺勢ますます高まり、

信玄自ら寺領三十貫を寄進して武田家の菩提寺と定めたのだった。

武田軍の旗指物「風林火山」は快川和尚の筆といわれており、その旗は同じ甲州の雲峰寺に現存している。

信玄亡き後、長子の勝頼がつつじヶ崎の館よりこの寺に信玄の遺骨を移した。現在でも本堂の裏手にかつての武田軍団の諸将の墓に囲まれて武田信玄の霊廟がある。

その快川和尚は、天正十年に百十四人の衆僧と共に織田の軍勢に三門楼上に追い上げられて焼き討ちに遭い従容として入寂したという。其の際に「安禅必ずしも山水を須いず、心頭を滅却すれば火もまた涼し」と唱えたのは有名である。

このとき全堂宇が焼失したが天正十九年に至って徳川家康がこの寺を再興した。徳川には武田からの降将が多く、家康としても武田家の菩提寺を再興するにはそれなりの人心収攬の効果を狙ったのに相違あるまい。

その後享保年間（1716～36）に柳沢吉保が大補修をして、現在では約1万坪の境内に本堂、庫裏、開山堂、三門、赤門（四脚門）が配置され三門の側に快川和尚の喝（け）が記されている。

この名僧快川和尚がなぜ焼殺されるような羽目に遭ったのか、以下の理由があったのである。

天下の覇権を巡って織田信長に対抗していた当時の武田家には、以前から信長に打ち破られて、その追跡から逃れかくまわれた幾人かの客将がいた。

そのうちの一人が近江の小大名の佐々木義治である。義治と父義賢（佐々木六角承禎）は永禄十一年（1568）に上洛途上の織田信長に対し、本地の観音寺城と周辺の砦を固めて抵抗したが、観音寺城は落城し、佐々木父子は甲賀に逃れた。落城したのは同年九月十九日で、はやくも九月二十六日には信長は足利義昭を奉じて上洛している。

その後佐々木義治とその一行は同じ源氏の裔である武田家を頼って甲斐に落ち延び、甲府に程近い笛吹川沿いの名利恵林寺（現在塩山市）に匿われ

た。近江源氏の末裔である義治を甲斐源氏の総帥である勝頼はむげにはできなかつたのであろう。鬱蒼と茂る杉林に散在する僧坊は多数の落人を庇護するには十分過ぎたのである。

その後、信長勢の先陣、滝川一益勢の急追に甲府の武田の館から逃れた武田勝頼、信勝らは、現在のJR中央線の大月駅に近い、宿将小山田信茂の居城である岩殿城を目指して落ちる途中に、頼みとする小山田の投降開城を知り、一族郎党は棲雲寺の近くで壮絶な自害に追いこまれる。

一方、血眼の織田の追手がくる直前になって快川和尚は匿っている佐々木の一族を武蔵の国へ向かって逃がしてやり、怒り狂った織田勢にそのことを咎められて焼き討ちに遭ったのだと考えられる。一行を見送るとき快川禅師はすでに己の運命を知り覚悟していたに違いない。

恵林寺の地は、北上して笛吹川を遡り雁坂峠を越えたと、そこは武蔵の国、中津川に沿って秩父に抜ける往還に通じ、また桂川沿いに東行すれば甲州街道を辿って武蔵八王子に、また大菩薩峠を越えれば現在の奥多摩を経て青梅に行き着くなど、いずれも山を越えなければならぬが、他国へ抜け出るには至便の地であった。

佐々木義治の一行は武田の伝手(つて)を辿りながら、現在の甲州街道沿いに小仏峠を経て武蔵国に落ちていった。甲斐と武蔵の国境にある由緒ある寺院の高尾山薬王院は古くから武田家と親交があり、この時に落人一行の面倒をみたものと思われる。

また武蔵八王子にある信松院は天正十八年(1590)武田信玄の四女(六女との説もある)松姫の開基と伝えられ、通称松姫寺と呼ばれている。その松姫は、天正十年武田氏の滅亡の折に八王子に逃れ、舜悦禅師に帰依して出家し信松尼と称したが、天和二年(1616)五十六歳で没した。

一時は栄華を誇った武田家のお姫様も、主家は滅亡し、己は三十歳で出家する数奇な運命に流された一人である。

恐らく佐々木一族はこの松姫と共に武蔵に落ち延びたのであろう。苦勞を共にして生き延びた縁で、大正時代まで中村家は、高尾山の薬王院と八王子の信松院と親交があった。

佐々木一門の中村七郎右衛門信定は主筋と共にこうして武蔵まで落ち延びたが、ここで一族離散して夫々の道を進むことになったのである。見知らぬ土地ではあるが武器を隠して、百姓として江戸の西端の大久保の地に隠れ住むようになったと思われる。その頃はまだ民家は殆ど無く、クヌギやナラの雑木林や岸边に葦の生い茂った小川や沼沢地や竹藪がどこまでも続く武蔵野台地の一角であった。

先に述べたように1598年信定没後、息子の三兄弟は現在の東大久保、戸塚町、高田馬場に分散土着し、弟の一人が戦乱の世に命を落とした親族の菩提を弔うために高田馬場に一寺を起こし、寺名を先に落城した先祖の城にちなんで「観音寺」と命名したのであろう。ここで曲がりなりにも先にあげた疑問①中村家の祖先が大久保村に住むようになった理由と、疑問③菩提寺の寺名を観音寺とした理由が解けたことになるが、

最後に残った、疑問② 佐々木家の子孫が中村に改名した理由はこの時点では未だ説明できていない。

### 佐々木一族と観音寺城

佐々木家の居城である観音寺城は近江源氏の本拠である安土と五個庄町にまたがる織山（きぬがさ山）に築城された。この山は現在のJR安土駅から北東に三キロメートルにある標高四百三十二メートルの湖東平野の最高峰である。山容が美しく神名備の山として古くは信仰の対象になっていた。

観音寺城は山頂の天主を中心に砦、郭を配し、尾根伝いに日加田城、和田山城、伊庭（いば）城を、更に中仙道を挟んだ出城の箕作（みつくり）など十八の支城を擁した本格的な山城で、応仁から文明年間（1467～87）に活躍にした佐々木氏頼の築城といわれる。

氏頼はこの城を構えて、当時の南朝に味方し北朝方の北畠と戦った。室町時代になり天文年間（1532～54）には佐々木家総領家である六角定頼とその子義賢（後に剃髪して承禎と称した）が大改築を行った。彼らは京都の六角堂に屋敷を構えていたので佐々木六角氏と呼ばれていた。

永禄十一年八月、足利義照を奉じて上洛の意思を持った織田信長から味方

をするようにとの要請があったが、要請を受けた義賢は「現在足利十四代將軍として足利義栄公がおられ、天下に二公はおられぬ」と拒絶してしまう。

信長はこの返事を聞き早速翌九月には軍事行動を起こす。約三万の軍勢を動員し岐阜城を出発。同盟中の徳川からは松平信一が千名、湖北の小谷城からは浅井長政が三千名の援軍を繰り出した。浅井家は元来佐々木京極家（佐々木家の分家）の被官であったが越前の朝倉家と縁戚になってから独立したものである。

佐々木六角義賢（承禎）義治父子は観音寺城に本陣と守兵千名を配し、和田山城に主力の六千名を、やや離れた中山道沿いの箕作城に三千名を配備した。

これは観音寺城への道筋にあたる和田山城を攻める信長勢を観音寺城と箕作城の軍勢をもって挟撃する計画であったと思われる、

案に相違して信長勢は箕作城から攻め落としにかかった。十倍以上の敵勢に小さな支城はひとたまりもなく落城する。それを見て頼みとする和田山城も戦わずして降伏開城してしまった。

やむなく佐々木父子は山沿いに甲賀に逃れ、その後甲斐源氏の長者武田家を頼って落ち延びたことは前述した。

勝利した信長は岐阜城に待機していた足利義昭を観音寺城下の桑実（くわのみ）寺に迎え入れ九月二十四日に相携えて入洛の途についた。佐々木家滅亡後観音寺城は廢城となる。のちに信長が安土城を造成するとき観音寺城の石垣を崩して利用したと言われている。

現在日本三大山城の一つとして史跡となっている観音寺城跡には、山の東側から細い山道を上ってゆくと、かつて武将たちの邸宅であった曲輪の石垣が点在し、山頂付近では突然視界が開けて、右手に安土城跡が、正面に琵琶湖が霞んで見える。広い湖畔の平地には豊かな水田が広がり、湖の反対側には中山道を扼するいわゆる交通の要害の地にあることが判る。

平成十年に著者が辿り着いた山頂には周囲に大木も少なく、平成五年に焼

失した観音正寺の仮設の本堂には佐々木本流の平四つ目結の家紋が大きく認められた。

住職にお茶の御馳走になり中村の本家の家紋が佐々木家及び当寺の家紋と同じなので、何らかの姻戚関係があるのではないかと質問した。

「眼下にある石寺の町には佐々木さんが大勢住んでいらして、皆さん多かれ少なかれ大名家とつながりがあると称しています。当時の大名は正室の子以外に多くの側室の子がいて正室の長男が大名を継ぐとみなその家来になります。異母兄弟の数は一代で十数名になりますから十代も経つと大名の家系と称するものは百名を超える数になります」と住職は笑って答えた。

現在山の中腹にある西国三十二番の札所になっている観音正寺は、聖徳太子の創開と伝えられ、天台宗の寺である。過去に何回も火災に遭ったそうだが最近では、平成十六年に再建された。重要文化財に指定された千手観音像が有名である。

また佐々木家について付言すれば佐々木第九代の名主佐々木秀義は定綱らの息子と共に源頼朝の挙兵に呼応して参戦し、宇治川の戦いでは四男の四郎高綱が名馬「池月」を駆って、これも名馬「磨墨」に騎乗した梶原景時と先陣争いをしたことは有名である。

明治天皇の葬儀の日に殉死した乃木大将はこの高綱の後衛という。

## 京極氏

さて、佐々木家十一代当主の信綱には長兄重綱、次男高信、三男泰綱、四男氏信の四人の子息があった。仁治三年（1242）信綱没後長男の重綱、次男の高信は相応の所領を与えられ、所領の地名をとって夫々大原氏、高島氏を名乗った。三男の泰綱が佐々木家の十二代の当主（六角氏）を継ぎ、四男の氏信は近江六郡と京極高辻の館を与えられて京極氏を名乗った。

兄弟四人のうち三男の泰綱と四男の氏信が厚遇されたのは、二人の母が時の執権北条泰時の妹であったことと、近江の国の強大な御家人の佐々木氏の分裂を狙った泰時の策謀のためといわれている。昔からいろいろな事情によって長子相続が保たれた訳ではなかったのである。

従って近江の守護佐々木十二代の四男氏信は佐々木家を継げず、京極家の開祖となった。因みに京極家の家紋は四ツ目結であり、大久保村の中村本家の家紋と同一である。

ここで本著冒頭に紹介した「新編武蔵風土記稿」の一節を思いだしていただきたい。「(中村の)先祖七右衛門信時は佐々木近江守源ノ氏信十二代の孫中村外記信高の二子なり」という記述がある。

その時代、氏信の孫は何人いたかは定かではないが、京極家の嫡孫が京極貞宗であり、そうでなかった孫の一人が筆者の先祖中村信高であったということになる。

ここで、婆沙羅大名として一世を風靡した佐々木(道誉)高氏(1306～1373)に触れる。彼はもともと近江半国の守護京極宗氏の後継ぎであったが、大弘の乱以後足利尊氏に従い室町幕府の創立に尽力したので、その功により佐々木総領職となり室町幕府の重鎮となり豪快な人生を送った。

京極氏は戦国時代には一時衰退したが、豊臣秀吉の時代に再起し、徳川の世になって四国の讃岐に領国として万治元年(1658)丸亀城を建立し、爾後これが京極氏の本城となった。その天守閣の瓦には平四つ目結の紋が刻まれている。丸亀市立資料館蔵の京極家系図によれば、第十一代佐々木信綱までは佐々木家と共通で、以後氏信から京極家が始まっている。

## 佐々木神社

さて話が変わるが、ここ筆者の手許に「近江源氏祭(佐々木一族御祖神祭)ご案内」という一通の手紙がある。差出人は沙沙貴神社宮司、沙沙貴第三十四代 丘(おか)真杜(まもり)、差出人の住所は滋賀県蒲生郡安土町である。

JR安土駅南方の総面積七千坪の鬱蒼とした鎮守の森の中にその神社は現存する。佐々木神社には茅葺の楼門をはじめ本殿、権殿、拝殿、東西回廊などの大型木造建築八棟が並び、その全てが重要文化財に指定されている。

そして随所に佐々木氏の四つ目結いの定紋がみられる。前述したが、この佐々木神社は森の佇まいといい、風格のある建築群といい実に堂々とした神社で、これが京都市内にでもあつたなら相当有名な神社になつたと考えられるが、逆に現在の地点にあつたからこそ、昔の風情を保つことができたのかも知れない。

この近江国蒲生郡（蒲生野）の一带は古くはササキの郷、ササキの庄と呼ばれ沙沙貴山君（やまのきみ）の歴史から始まつたらしい。ささき山君にはいろいろな漢字が当てられている。古事記には佐佐紀山君、日本書紀には狭城山君、また新撰姓氏録、三代実録、続日本紀には佐佐貴山君の記述があり、古くから近江の国の蒲生郡を地盤としていたことは共通している。

この系統の家紋は加世貴（かせぎ）四つ目と呼ばれる紋で佐々木神社の宮司もこの家紋である。

中世以降、沙沙貴山君の子孫である山氏の末裔の六角氏が琵琶湖畔の街道を扼する大名として、南北朝に分かれた朝廷の乱れに乗じて活躍し、ついには近江の守護となつた。彼らは沙沙貴の土地を領有し、佐々木の苗字を名乗り古くからある沙沙貴神社を氏神とし、それ以来当地は佐々木源氏発祥の地となつたのだと考えられる。

神社で調べた系統図には宇多天皇を初代とする佐々木源氏の系図と、かなり以前に開化天皇から分かれた沙沙貴山君からの系図と二流れの系図があり、両者の家紋が異なることからみても、古い沙沙貴の地に六角氏の流れを汲む新しい佐々木が乗り込み以後両者渾然一体となつた感がある。

両者の系図の記載内容も全く同じで、同一人が両方の系図に名を連ねている。家紋も中世以降は平四つ目結に統一されている。

この神社の歴史を紐解くと当神社の創建は第十二代の景行天皇の御代「近江志賀に皇居を定め給ふに、先づ社殿を造営し、国家鎮護の神と厚く崇め給う」とある。景行天皇の存在自体が不確かではあるがとにかく「古くから」この神社は存在したらしい。

記録によれば、その後村上天皇が天曆三年（949）に社殿を修造した。

文治二年（1186）には源頼朝が「佐々木大明神」なる額を自書し、この額は今でも神社の表参道の大鳥居に掲げられている。永正四年（1514）には六角高頼（佐々木二十二代）が社殿を改築造営したという。

高頼は観音寺城を大改築した六角定頼の父親である。ただし佐々木第二十三代当主は系図によれば定頼ではなく氏綱となっている。ついにながら氏綱の次男義景は朝倉家を創設、後の越前の雄朝倉義景その人である。

その後社頭は荒廃し、現在の「楼門」と「回廊」は延亨四年（1747）の再造物であり、「本殿」、「権殿」、「拝殿」の三棟は天保十四年（1843）の火災焼失後、丸亀城主京極高明が新築したものという。

現在でも時代が時代ならお殿様である佐々木一族の京極家や黒田家の当主の参拝があり、佐々木良作元民社党委員長も一族として参拝されたという。また乃木大将の乃木家は佐々木四郎高綱の後裔で神社の境内には「乃木將軍お手植えの松」と安土小学校の児童を相手に話した「乃木さんのお言葉」の石碑がある。

## 系譜の確定

佐々木神社の社務所に立ち寄り神主家蔵版の佐々木家の系図を見せてもらう機会を得た。この神主家は佐々木家八代佐々木季定の代に神主家と武家に別れた由。神社ならでは、畳と同じ横幅の装丁の立派な巻物状の系図が残っていた。確かに佐々木の十二代に氏信との記載があり、嫡子の十三代宗綱、その子十四代定宗と同じ欄に十数名近くの庶子と並んで、氏信の子行胤、氏信の孫として中村外記信高なる人物名が記載されていた。

この信高の次男こそが新編武蔵風土記稿にある中村家の先祖七右衛門信時その人と断定できる。

中村家の歴史についていえば、曲折を経たが佐々木神社の所有している佐々木家の系図の内容と、本稿の冒頭に引用した新編武蔵風土記稿の記載内容とがここでピッタリと一致したのである。江戸時代初期に記載された「家系書一巻」の内容は嘘ではなかったことが、証明されたのである。

ここで何故佐々木十二代氏信の孫の外記信高の時に佐々木から中村に改名したのか？ という疑問が残るが、当時は所領の地名を苗字にすることが普通に行われ、中村の姓は村の中心ということで全国各地の村のリーダーが苗字に採用した。東村、西村、北村、上村、下村、など同様に地理的な名前も用いられた。庶子の身分である外記信高の場合も嫡流の佐々木名を使用することを憚り、中村を名乗ったものと思われる、因みに現在全国の中村姓の人口は五百万と言われる。

ここに至って最初からの疑問②である佐々木家と中村家の関係についての問題が解決したものと思われる。

永禄十一年（1568）に観音寺城が落城し、曲折を経て甲州の恵林寺が炎上し、佐々木一行が武蔵国へ向かったのが天正十年（1582）である。この時武蔵へ落ち延びたのが、年代からいって中村信定（1598没）である。信定の息子が政義（1620没）で万治二年の銘のある彼の墓は高田馬場の観音寺に残っている。

武蔵風土記に掲載された初代信時から七代信定までは当主の名前が確定しているが、ここまで来たら信定ら九代目の理右衛門までの当主名を確定したいと思ったのは当然である。

その後早稲田大学の郷土史研究グループの調査によって、なんと中村の菩提寺である高田馬場の観音寺に大久保中村家の系図が残っていた事実が判明した。この系図には各代の当主の元服名と幼名、号および没年月日まで記載され、やや詳し過ぎるのが却って怪しいくらいである。

元服名は「信」と「政」の字を用いたものが多く、幼名や通称に関しては七右衛門、七郎右衛門、理右衛門、利右衛門が多い。甚だしいのは理右衛門改め七右衛門などとややこしいものも散見される。

系図によれば十四代信治は文化七年（1807）没、十五代政信は嘉永三年（1850）没だが両者ともに通称理右衛門とあり、文政十三年（1830）編の武蔵風土記に記載された理右衛門は編纂時期からみて中村政信のことであろう。真偽は別として明治時代までの系図を別表に記す。

ここに至って武蔵風土記記載の中村家の系図がようやくやく解明できたのである。

もつとも作家の司馬遼太郎によれば、彼の家系伝説では佐々木源氏の家系ということになっているそうだが、

「日本人の本姓などはすでに鎌倉のころからウソが多く、例えば佐々木源氏は宇多天皇御裔になっているが、セルバンテスがきけば爆笑してドン・ササキという滑稽日本騎士物語を書いたであろう。江戸初期にいたって幕府が諸家に系図を書いて出させるようになったとき、上は徳川家から下はそのあたるの徒士や富農、富商にいたるまで家系を創作した。

朝鮮のように姓の本貫等は明確でなく、源平藤橘のどれをとろうといわば勝手であったし、いまも一億人の日本人にとっては選りどり見どりである。」（著書「街道をゆく」）という意見もある。

## 明治以降

時代は明治の初頭に飛ぶ。「東京府豊多摩郡誌」の町政の項にこんな記載がある。「当時東大久保には世襲的名主中村柳次郎あり、明治四年六月同村及び二ヶ村の副戸長を命ぜらる云々」。この柳次郎は新編武蔵風土稿に記載のあった信時七右衛門より数えて十八代目の当主正保の通称である。

「同八年中地租改正の事始まるや東大久保の島田久太郎、中村慶治、中村鎌太郎夫々地租改正係りを命ぜられ云々。地租改正の後、同十一年十一月二日、東大久保町、東大久保村、西大久保村、大久保百人町及び諏訪村の五ヶ町村連合戸長役場を置き、中村柳次郎其の戸長となる」

この文中の中村鎌太郎という名前は筆者も子供るとき耳にしたことがある。彼は中村家二十代当主で、筆者の曾祖父にあたる。当家にはこの人がサインした土地の貸用証がまだ残って居る。中村慶治は鎌太郎の父親である。

更に豊多摩郡誌の教育の項には、

「本町に公立小学校の起これるは実に明治十二年にあり、是より先明治八年

七月、第八大区三小区の小学校として柏木に豊水小学校の設立せらるるや、戸長中村柳次郎学区取締を命ぜられ云々」とある。

その後明治、大正時代には中村家は新宿の地主としてよい時代を謳歌したらしい。そしてお決まりの地主の末っ子の一人息子が放蕩息子として登場する。

この放蕩息子はどうかやら筆者の祖父であるらしく、長男として三人の姉を差し置いて手に入るはずの中村家の家督の座を気丈な長姉に奪われてしまう。蛇足ながらこの長姉タイは秩父宮殿下（昭和天皇の弟）の乳母をしていた。

それ以降、この姉の家系が本家になり筆者の家は祖父の代から分家になってしまう。

準禁治産者である筆者の祖父正策はなんの財産も分けて貰えず、筆者の父金弥は鎌太郎次女トウと養子縁組をしてトウの財産を相続している。

そんな事情もあり明治末期以降の家系図は非常に不明瞭になり、戸籍（除籍）謄本を調べても祖父正策の欄は空白で何も書かれていない。

放蕩が過ぎて準禁治産者の宣告を受けて戸籍から抹消されたのかも知れないし、なにかの陰謀でそういう破目にあっただのかも知れない。その後は生々しい話になりそうなので、更なる追跡は止めておいたほうがよさそうである、

筆者の覚えている祖父正策は中村花秀という俳号の町の俳諧師として活動し、南面を描いたり新宿山の手七福神を纏め上げたり、風流の人としての印象が強い。

紆余曲折の末、こうして我が家の歴史が曲りなりにも解明できた。真偽はともかく、過去は過去として、この先は二人の愚息に後を託して筆を置くことにしよう。（完）

当主	元服名	没年	西暦	(通称)
初代	信時	宝徳2年	1450	七右衛門
2代	信義	文明3年	1471	七右衛門
3代	高信			七郎右衛門
4代	政信	明応3年	1494	七右衛門のち外記
5代	政治家	永正10年	1513	七郎右衛門
6代	政利	永禄2年	1559	外記のち七右衛門
7代	信定	慶長3年	1598	七郎右衛門
8代	信峯	元和6年	1620	七右衛門
9代	政候	寛永12年	1635	七郎右衛門
10代	政義	万治2年	1659	七右衛門のち利右衛門
11代	信利	宝永4年	1707	七右衛門
12代	政春	享保14年	1729	七右衛門
13代	信春	寛政4年	1792	利右衛門のち七右衛門
14代	信正	文化3年	1807	理右衛門のち七右衛門
15代	政信	嘉永3年	1850	理右衛門のち七右衛門
16代	信光	文政8年	?文政は6年迄	豊三郎
17代	俊民	明治6年	1873	
18代	正保	明治14年	1881	柳次郎
19代	慶治	明治43年	1910	半右衛門
20代	鎌太郎	昭和3年	1928	

中村鎌太郎  
 二十代  
 |  
 タイ (長女)  
 トウ (次女)  
 シュン (三女)  
 正策 (長男)  
 |  
 金弥  
 |  
 晃也 (筆者)  
 二十一代  
 |  
 正保  
 |  
 誠 (現本家)  
 二十二代  
 |  
 二十三代